

# *Sunshine Sketches of a Little Town* ～ユートピアへの案内人 Mr. Smith を中心に

足 田 和 人

## 序

*Sunshine Sketches of a Little Town*<sup>(1)</sup> は20世紀を代表するカナダの書籍<sup>(2)</sup>として挙げられている文学作品である。作者である Stephen Leacock とともに、今でも多くのカナダ国民に愛され親しまれている。

Leacock は政治経済学者であると同時に歴史家、教育者、そして評論家でもあり、様々な種類の文章を書いていた。しかし一般には、多くのユーモア作品を残した作家として最も名が知られている。

彼は1869年イギリスに生まれた。そして1876年6歳の時、家族は Ontario 州 Sutton という村に移住し、両親は農業で細々と生計を立てていた。Upper Canada College, University of Toronto で教育を受ける。その後 University of Chicago で政治経済を学んだ後、McGill University で教職に就く。

Ralph Curry は *Stephen Leacock and His Works* の中で次のように述べている。“Any evaluation of such a prolific author as Stephen Leacock must recognize the multiplicity of influences which affected his creative effort. There are British and American and Canadian influences.”(5-6)

彼の経歴を見ればわかるように、ヨーロッパと新大陸の狭間にあるカナダという国の状況は、Leacock 自身にも投影されている。そして Leacock も対極的な価値観に常に囲まれ、矛盾を抱えながらも未来を見据え同時代を生きていた。

この作品はカナダの、古き良き田舎町を描いた小説である。その小さな町を題材にし、彼が心に描いていた理想のカナダ像を作品の中に作り上げた。Leacock が少年時代に住んでいた Sutton から程近い、Orillia という実在の町をモデルとしたものである。

この小論では、preface の中で彼自身が“I would sooner have written in *Alice in Wonderland* than the whole *Encyclopaedia Britannica*.”(x)と表現しているように、イギリス系カ

ナダ人<sup>(3)</sup>の原風景と言えるようなユートピアとしての共同体 Mariposa<sup>(4)</sup>の姿と、その重要な登場人物の1人である Mr. Smith を中心に作品の意義を探ってゆく。

## 1

*Sunshine Sketches* は1912年に出版された作品であるが、舞台となる Mariposa の時代背景は Glenn Clever が論じているよう<sup>(5)</sup>に19世紀の後半である。町にはそれぞれの職業を持ち、ここで生活している多くの人物が描かれる。その描かれ方は多様であり、わずかな言及のみで終わってしまう者もいれば、複数の章にわたって重要な役割を演じる人物もいる。

しかし、ほとんどの登場人物に対して、精神の内面にまで入り込むような深く詳細な描写はなされていない。作中における彼らの役割は、生き生きとした人物像というよりも、Mariposa における典型的で戯画化された人物と考えてよいだろう。

物語の語り手はこのような市井の人間達を、読者に近づけて共感を呼び起こす。その語り手の根本にあるのは、彼らの愚鈍なまでの正直さと素朴な姿であり、町に住む他の人々に対する共感と博愛である。同時に彼らの職業人としてのプライドや、理想に対する純粋な心情も彼らの行動から表れてくる。

その一例として町で床屋を営む Jefferson Thrope から、語り手の労働者観を見てみよう。“moving about into the steam, razor in hand as grave as on operating surgeon”という語り手の口調には独特のカリカチュアが含まれているとはいえ、自らの仕事にプライドをもった職人像があらわされている。彼は町の人々からもよく知られ、好感すらもたれている人物だ。狭い店内や髭剃りの料金など、具体的な描写を文中にちりばめることによって、地味な職業であることを印象づけ、また同時にそこは様々な情報の集まる場所としての、町の床屋の役割を示す。Mariposa の人々は決して狭い町の中にとどまらず、*Mariposa Post* という地元紙を通して、世界の出来事にも目を向けている。床屋の椅子の上は広い世界を眺めるための展望台でもあった。

そんなところから、Jefferson の投機好きな側面が顔を覗かせてくるのである。50セントで町の人々の髭剃りをする彼は、世界経済やマーケットの状況に詳しい。しかし実は緻密な計算によって投機が行なわれているのではない。彼は地道な職人と、一発ねらいの経済人の両方の顔をもつ人物である。

Jefferson はある鉱脈を掘りあてたおかげで、一時的に大金を手にする。町はその話で持ち切りになり、新聞の取材も受ける。ここで、語り手自身が物語の登場人物になり、彼の打ち明け話を直接読者に伝える。“I tell you, if I was to make a million out of this Cubey, I'd give it straight to the poor,”(51)

その後、大金はキューバのバナナ農園への投資に失敗し、すべて失うことになるのだが彼の日常は変わらない。“I liked it about Jeff that he didn't stop shaving.”(48)という語り手の声は、同時に Mariposa 住人の声であり、語り手によってユートピアに招待された読者も、Jeff の人間性に対して町の人々と同じ視線を送っていることに気づくのである。

物語の語り手は、“I don't know whether you know them”, “mind you”, “everybody knew”などといった表現を多用し、巧みに読者の意識を小説空間の内部へ誘い込む。我々はいつのまにか、Mariposa の住人の 1 人になってしまう。物語は常に語り手、登場人物、読者を内包した Mariposa という共通空間で進んでいく。たとえ、耳慣れない地名や、初めて知った名前などが提示されても、“you know, I think...”などというフレーズで語られた瞬間、以前から知っていたような感覚をもってしまう。また、知っていなければ、その空間の一員になれないような錯覚にも陥るのである。

そして、語り手自身も“Do I say that...?”などの間投詞を挿入して、昔話をしているように見せたりもする。物語空間から出たり入ったり、Mariposa の町に降り立ったり遠くから眺めたりと、語り手の視点は自由自在に移動するのである<sup>(6)</sup>。

読者は受動的な読み手から、積極的な参加者となる。それは、無名の参加者ではあるけれども、古きよき時代のカナダの小さな町に、強い親しみを感じているという点において、その空間を共有することができるのである。

加えて語り手は、固有名詞を必要以上にくり返し提示している。それが地名だとすると、そのあとに“I suppose this is just the same in every one else's town as in mine....” (13) とすぐに一般化してしまうことも忘れない。それぞれの読者が各自の意識の中で、固有名詞を身近な場所に変換できるようにしているのである。その一方、神話の地名や、他の国の実在の地名などもしばしば取り上げ、Mariposa の内部の世界と、遠い外部の世界を分けて描き、語り手、登場人物、読者を包み込んでしまう。

この作品には数多くの人物が登場する。たとえそれが物語中で重要な人物でなかったとしても、姓と名、その後には職業や会社、職種まで細かく説明されている。ストーリーと全く関係がないことが多いのだが、同じ人物が 1 度だけでなく 2 度 3 度と提示され、名前の後に繰り返し彼の職業が示される。*Sunshine Sketches* のようにストーリーの緊張感も、繊細な人間関係も存在しない空間において、このことは別の効果をもたらしている。

名前と職業が読者の頭の中で、常に一致させるというということは、その人物と知り合いであるかのような感覚を残すのである。さらに職業人としての姿は独特の戯画化を伴い、読者自身にそれぞれの人物像を形成する作業を委ねてしまっている。こうして Mariposa は Leacock にとって、扱いやすい舞台装置となる。

このような手法は、彼のユーモアをより効果的にする為の手の込んだ準備なのだ。葬儀屋の Golgotha Gingham が登場するだけで、Mariposa Belle の船上や、ホテルのバーに独特の雰囲気が加わってくるのもこの為である。しかし、その語りは極端へと向かうことはない。物語空間の安定は常に保たれているのである。

Leacock はそのような人物を、背景描写に有効利用している。その先に起こる事件を全く暗示することなく、予め次の章で登場する人物を読者の記憶に残しておく。例えば、Dean Drone は物語の最初から何度も登場しているのだが、特別に細かな人物描写はなされていない。4章に入って初めて、彼がエピソードの中心に置かれていることに読者は気づかされる。同様に7章から9章までの中心人物となる Mr. Pupkin は既に3章で、彼の滑稽な行動が語られ人物像が予め紹介されている。その時点では単なる戯画化された脇役の1人であるかのように描写され、語り手はほとんど興味を示していないように見える。ところが、後に彼は恋愛がテーマとなるエピソードで、主役を演じることになる。そのための布石として、語り手は彼の生真面目で慌て者である性格を、別のエピソードの背景として用いるのである。

Mariposa という地名は、特定の場所としてではなく、読者がそれぞれに抱く古き良きカナダのイメージを表す代名詞となっている。人名の使い方は、ある一個人を表現するというよりも、その町に住んでいるであろう典型的な人物を想起させるために用いられている。Mariposa というフレームは、いつのまにかカナダ全体にまで拡大され、作品中で描かれた人々は職業や町での一定の役割をもちながら、どこにでも存在可能な人物として姿を変える。

## 2

*Sunshine Sketches* の物語は、町の様子を読者に紹介することから始まる。語り手の視線は Mariposa 全体の描写から、町のメインストリートに移り、あるホテルの玄関に立つ Mr. Smith にスポットを当てる。そしてさらにホテルの内部にまで描写は及ぶ。しかし、なぜ Mr. Smith のホテルの描写から物語は始まるのであろうか。Mr. Smith は Mariposa 出身ではない。それどころか、北方の森林伐採の現場で賄いのコックをしていた人物である。その後大陸横断鉄道を利用した、食品取引での儲けを元手にホテルを開いているのである。つまり、お世辞にも素性が知れた人物ではない。彼は Mariposa に住んではいるが、Mariposa の人間ではない。

そんな人物の紹介から物語が始まっているということが、人物としての Mr. Smith の特殊性を示しているといえよう。第1章は前半4分の1こそ町の描写に割いてはいるが、題名にあるとおり Mr. Smith のホテルに関する話題である。

例によって、始めから直接に人物を描いていくのではなく、町の風景から徐々に視線のズームインを行なうと、偶然語り手の目に入るホテルの入り口に彼が立っている。そして語り手の知識の範囲で、何気なく Mr. Smith のに関する情報を読者に伝えていくという手法をとる。

この後いくつかのエピソードで Mr. Smith が中心的な位置を占めることになる。彼はいわゆるよそ者であるが、何度か起こる町の行事や事件の影で、その結果に大きな影響を及ぼしていく。彼の判断は人々の目の届かない所で行なわれているので、住民からの喝采を受けることもない。いつもホテルの事務室で黙々と仕事をこなしながら、Mariposa の町に思いをはせている。

“Josh Smith can in fact be viewed as *Sunshine Sketches*' closest approximation of a 'hero' and its most convincing argument for a unity of plot.” (61) と Gerald Lynch が言うように、Mr. Smith は Mariposa で描かれている他の人物とは大きく異なっているだけでなく、作品全体を考える上で欠かすことのできない重要な役割を演じるのである。

Mr. Smith の行動は、町に大きな影響を与える。ホテル経営では Mariposa の町に語らいの広場を作る。Jeff Thrope の金銭的苦境に手を差し伸べる。Mariposa Belle を沈没の危機から救う。借金で維持が難しくなった教会を救う。そして、物語の最後には保守派の候補者として、国政選挙に立候補し見事当選を果たす。

これらのどれをとっても、これ以上ヒーローと呼ぶにふさわしい行動はないのである。ところが彼の行動は常に神出鬼没であり、Mariposa の表舞台で行なわれるものではない。あからさまに金を使って問題を解決に導くこともあれば、犯罪者とも言えるような行動で Mariposa の危機を救う。そして、最も重要なことは、Mariposa の住人はそれらの行動に対してほとんど眼を向けていないのである。Mr. Smith 自身も自分にスポットライトが当たることを良しとしていない。

*Sunshine Sketches* の影のヒーローとも言える、不思議な人物 Mr. Smith の姿を物語中のエピソードを見ながら考えてみよう。1章での主題は Mr. Smith が経営しているホテルのバーに与えられた酒類販売許可の取り消しについてである。ホテルでの酒類提供は午後11時までと取り決められている。小さな町のことであるから、Mr. Smith は客の様子に応じて時間通りに店を閉める時もあれば、しばしば閉店時間を延ばすこともあった。

Mr. Smith がその許可の取り消しを命じられたのは、11時に店を閉めなかったからではなく、決まり通りの時間に Judge Pepperleigh を店から締め出してしまったことによる。つまり法律を守っていたにも関わらず、判事個人の逆恨みから免許の取り消し処分を受けてしまったのである。

しかし、Mr. Smithはその取り決めに素直に従う。恨み事を言うことも、取り乱すこともない。彼にできることは決められた手続きに則って、再度許可の願いを提出するだけである。彼の相手は町の判事であり、彼に反抗を示しても勝算が無いばかりか、町全体を敵にしてみうことを彼は知っている。町の「法」は判事の手の中にある。現実的に自分の力が及ばない方向には目を向けず、Mr. Smithは機知と判断力で自分が生き残る術を探すのである。

何よりも彼は、Mariposaの住人を味方につけようとする。ホテルの前で営業しているメリーゴーランドの主人に10ドル札を渡し、子供達が無料で乗ることができるよう一晩中貸切にしてしまう。また、町にあるいくつかのクラブの会員となって会費を支払う。さらには、Mr. Smithのことを快く思っていないDean Droneの教会に洗礼盤を寄付し、あらぬことかPepperleighが属する保守党へ、何百ドルもの政治献金をするのである。

“I ain't going to try to raise no prizes on the public. The hotel's always been a quarter and the caff's a quarter.”(31)とMr. Smithが語る彼のホテルに対する思いは、ある面では素朴で人間的なものである。彼はホテルを、町の人々が集まる広場にしたい。広場とは誰もが好きな時に集まり、わずかなお金で酒を酌み交わし語り合う場所である。Mariposaにおいて人が集まる広場というのは、ユートピアの中心地であることを意味する。人々の交流なしではユートピアは成立しないのだ<sup>(7)</sup>。よそ者であるMr. Smithは、共同体の中に足を踏み入れるよりも、人々を呼び寄せることで共同体に近づこうとする。

そんなMr. Smithは酒類販売免許取り消しを受けた後、フランス風のカフェを突貫工事で完成させる。本格的なフランス人シェフを雇い、上等な料理を安価で提供し、地下では喧騒を離れて静かにビールが飲めるカウンターも作った。人々はカフェに集まり、ホテルは以前よりも多くの人で賑わった。そんな頃、町の人々の考えを尊重した判事は、バーの再開を許可するのである。

しかし、その一方で語り手が“a wide and sagacious philanthropy”(26)と皮肉めいた言葉を用いているように、Mr. Smithの博愛主義は彼自身に対しても、常に利益をもたらすものとなる。メリーゴーランドを無料にしたことで、子供達の親はホテルのカフェで時間を過ごす。Mr. Smithが会員となっている集まりは、ホテルで行なわれる。教会への寄付は、牧師からの敵意を和らげる。政治献金に至っては完全なる賄賂である。

これらエピソードは一見単なる機知から生まれた美談ともとれる。しかしMr. Smithはホテルの評判を上げることにより、Mariposaの中で彼の足場を確実なものにする。そして同時に彼はホテルの経営者として確実に利益を手に入れているのである。Mr. Smithの行動から生まれる経済的利潤と博愛主義は、矛盾することなく同時に達成されている。“Mr.

Smith became a local character. Mariposa was at his feet.”(25)と語られるように、彼のホテルと Mr. Smith 自身は Mariposa になくなくてはならない存在となるのである。

4 章, 5 章, 6 章は Dean Drone と経済的苦境に立たされている教会のエピソードである。これらの章では、木陰に座り一人静かに Theocritus をギリシャ語で読むような、世間離れした牧師の人物像と、教会の存続の為に様々な協力を惜しまない町の人々の姿が、多くのページを割いて描かれている。しかし、それらの努力も結局実を結ぶことはない。教会の借金は膨らんでいくばかりであった。

6 章の“The Beacon on the Hill”と題されたエピソードで、Mr. Smith は放火という掟破りの方法で教会を救うのである。教会が火災保険に入っているのを知っていた Mr. Smith は密かに教会に火を放つ。火災の現場では、人々は総出で火が燃え広がらないよう全力をつくす。そこでも Mr. Smith は住民の中に入り、協力を惜しまない。

Mariposa の住人も、その犯人が Mr. Smith であることをうすうす気づいている。しかし、火災保険が下りることによって教会の借金が帳消しになり、教会自体も新しくなることを知っているため、誰もそのことを口にはしない。Judge Pepperleigh ですら知ってか知らずか、保険会社の異議申立てを直ちに却下してしまうのである。同様に語り手もあからさまには彼の行動を説明しない。なぜなら、語り手も Mariposa の住民の一人だからである。

彼の行動は、直接的ではないし、表立っているわけでもない。しかし、Mariposa の人や町を暗に操作している。ここでの Beacon は教会にともされる灯であるのと同時に、ユートピアとしての Mariposa を維持し、人々を導くために必要な明かりなのである。教会の姿は、町の繁栄を見下ろし、再確認できる場所として生まれ変わった。過去の否定と一種のマテリアリズムとも言える未来の肯定を、彼は放火による教会の建て替えで両立させてしまったのである。

Mr. Smith は経済の力を用い、ユートピアとしての共同体と、そこに住む人間達の繋がりを維持する不思議なよそ者なのである。またそれが直接的ではないにせよ、すべては彼自身の個人的な利益にも繋がっている。その行動が意図的なものなのか、偶然なのかは語り手は決して明らかにしない。では、なぜ Mariposa に彼のような人物が必要なのであろうか。

Mr. Smith は外部から Mariposa に入ってきた人物であり、彼自身よそ者であるという認識をもっているため、積極的にはコミュニティに関わっていない。その姿は、イギリス、アメリカを始め様々な場所で経験を積み、Orillia という小さな町に惚れ込んで、湖のほとりに家を建てた Leacock の姿に通じる。幼少時にその近辺に住んでいたとはいえ、彼自身も Orillia の町では長い間よそ者であった<sup>(8)</sup>。

Mariposa という共同体は現実には存在しえない。なぜなら、カナダの開拓時代を過ごし

た人々が幻想として心に抱いている町だからである。その幻想を直接描いただけでは、ただの陳腐なユートピア小説になってしまう。Ralph L. Curry の伝記によれば、“He had intended the love story between Zena Pepperleigh and Peter Pupkin to be a central theme to unify the story.”(108)とある。実際当初 Leacock は牧歌的な男女の物語を、作品の中心に置くつもりであった。

しかし、その計画とは裏腹に Mr. Smith が作品全体に統一を与える人物となった。これは結果的に大成功であったと言える。よそ者である Mr. Smith は Mariposa の人々とは異なった価値観をもっている。純朴な人々の住むユートピアに輪郭をあたえ、物語のなかで浮かび上がらせるには、それと全く性質の違う Mr. Smith が必要不可欠なのである。

Mr. Smith が外界から経済という切実な現実と、広い世界で得た知識と経験を携えて、Mariposa にやって来た。彼自身は町で起こる出来事に対して冷静な目で捉え、最も効果的な方法で対処していく。それによって彼自身の行動をひけらかしたり、自慢したりすることはない。彼は黒子のような姿で、このユートピアに生じるほころびを縫い合わせ、ぽっかりと空いてしまった隙間を埋めていくのである。

## 3

Mariposa の一員として町を描写する語り手は、Mr. Smith に対して何の意見も表さない。そして、全ての町の人々に暖かい視線を投げかける語り手ではあるが、Mr. Smith に対しては、淡々と彼の行動を追っていただけである。町の全てを熟知し全能に近い語り手も、Mr. Smith の行動に関してはその詳細を語らず、彼の意図も読者が暗に理解できるような語り口にして断言を避けている。

Mariposa の住民は皆、無垢で素朴な人間達の集まりでなくてはいけない。Mariposa の町にヒーローとしての住人は不必要である。しかし、それと矛盾しているようではあるが、ドラマのない牧歌的ストーリーであることを避ける為には、事件を解決してくれるヒーロー的人物は不可欠である。もし町の中にヒーローがいたとすると町の安定を壊すことになり、ユートピアはユートピアの形をなさなくなる。語り手自身が行動を起こすことは不可能である限り、よそ者としての Mr. Smith に Mariposa を委ねるしかないのである。

Mr. Smith は Leacock が姿を変えた作品中の影武者として、ユートピアとしての Mariposa と、現実のカナダの田舎町を絶えず結びつける役割を果たしている。空想の Mariposa と現実の Mariposa を結びつけていくには、視線を投げかけ語る人物と、物語中で行動に移す人物は分離されていなくてはならない。したがって、語り手は行動を起こさない。そして逆に、Mr. Smith は語ることをしない。彼の役割はただ説明せずに行動することなのであ



る。

Leacock は Mr. Smith というよそ者を物語に採用した為に、これらの仕事を実に巧みに振り分けることに成功した。Leacock 自身も認識していたであろう物語世界における幻想と現実のギャップを、巧みに埋めていくことに成功したのである。

*Sunshine Sketches* におけるユーモアは、全てこの点からスタートしている。Leacock のユーモアの特徴は、彼の出世作として有名な短編小説 *My Financial Career* の冒頭<sup>9)</sup>を見てもわかるように、語り手としての自分自身を読者と同じ平面まで引きずりおろし、複雑化した世の中の仕組みについていけない滑稽な語り手の姿を披露するものだった。読者はその人物を Leacock 本人として読む。彼が立派な学者であるにもかかわらず表れてくる行動のギャップと、読者自身もそれと同じくらい滑稽な人間であるという共感が、同一の空間で起こることで笑いを引き出す。

しかし、これと全く同じ事を *Sunshine Sketches* で採用していたら、この作品のユーモアはそれほどの効果は上げないであろう。ユートピアと現実とは、実際には合い入れない世界である。したがって、語り手がその俗世間的な要素を背負うことは不可能なのだ。語り手は Mariposa の内部にいる住人の 1 人であり、幻想が支配するユートピアの中にいる。

その矛盾を一挙に引きうけているのが Mr. Smith なのである。彼はユートピアを壊すことなく、迫り来る現実に対処していく人物である。彼自身も現実という壁に苦しめられながらも、ユートピアに起こる暗黒を全て受け入れ対処していく。

教会の放火という作業によって、Leacock は Mr. Smith を仲介者として、宗教と経営に関するテーマだけでなく、町の過去と未来、そして理想と現実という相反する問題を、文字通り教会に灯をともしという荒業で融合させた。そして当然の成り行きとして、Mr. Smith は政治という現実 hands に手を染めていくことになる。この作品のクライマックスは Mr. Smith の国政選挙での当選劇である。ホテルの経営者である彼が、当選に至った経緯は *Sunshine Sketches* の物語全体を象徴している。

3 章の“The Marine Excursion of the Knights of Pythias”のエピソードで中心となるのは、Mariposa Belle という町の美しさと、人々の共同体意識を象徴した遊覧船である。ところがその華々しい早朝の出船から一転し、いざ帰港となった時に船は少しずつ沈んでいく。活気のある船上の雰囲気とは裏腹に、この船自体は旧式のおんぼろ遊覧船なのである。乗船している町の人々は皆取り乱し、的確な判断力を失い慌てふためく。

種を明かせば、湖の水深が浅かったので、船底が湖の底についてしまい、船が動けなくなっただけという落ちがつく。この一連の事件は Leacock 得意のユーモアではあるにせよ、Mariposa Belle は Mariposa の町の危ういユートピア性を表している。

Mariposa Belle での彼の活躍は、船底に空いた水漏れの穴を塞ぐという単純なものであった。Mr. Smith は度重なる問題に対して決して表舞台に出ることはないが、Mariposa の「陰」の部分をもつ「陰」の力で町を日の当たる場所に戻してしまうのである。Mariposa Belle の水漏れと同様に、町にはいくつもの欠陥や危機がある。人々の無知の大部分は経済的知識の無知、都市的価値観の欠如から起こる未来への見通しの甘さである。

このエピソードが表しているのは、Mr. Smith が Mariposa の町をユートピアという湖を進む水先案内人であり、この町の先にある危険をいち早く察知し、安全な航路を示してくれる人物であるということだ。彼は Mariposa のユートピア性を最大限まで維持することのできる人物なのである。このことは 3 章の Mariposa Belle のエピソードで証明された。そして読者は 8 章の“The Great Election in Missinaba County”で国政選挙に保守党の候補として立候補する彼を見ることで、我々は Mr. Smith が Mariposa で果たす最終的な役割を知るのである。

Mr. Smith は自分の立候補に際して、今までと同様に彼の政治信条などを正面切って主張することはない。それどころか、敵対する自由党に献金さえしていた。小さな町の田舎選挙では、政的な主義、信条などよりも、その共同体がもつ価値観を知ったものが多くの支持を得る。

“In reality, Mr. Smith was on the eve of one of the most brilliant and daring strokes ever effected in the history of licensed liquor”(21)と 1 章で解説されているように、8 章での“*But you can't understand the election at all, and the conventions and the campaigns and the nominations and the balloting, unless you first appreciate the peculiar complexion of politics in Mariposa.*”(154)と至る道筋を見れば Mr. Smith と Mariposa の関係が全体のストーリーの中でのバックボーンになっていることを理解できるであろう。

両者の関係の中でもう 1 つ重要な要素は、博愛と利益である。既に述べた Jefferson Thorpe にしても、Dean Drone にしても町とその人に対する気持ちは博愛に満ちているのであるが、経済感覚の欠如が彼ら自身を破滅寸前にまで追いつめてしまう。

一方、ホテル支配人である Mr. Smith の価値観は、個人主義的であり即物主義である。それゆえに、語り手から好意の眼差しでは見られていない。しかし、今までの議論からもわかるように、Mr. Smith が行動を起こすことによって、自らの利益を確保しながらも、結果的には Mariposa に対してもユートピア性を保つ力となる。彼の経済至上主義は、実利的な行動が伴うことで結果的には博愛主義に変化してしまうのである。

Leacock は Mariposa において、彼が理想とする幻想の空間を描いている。しかし、同時に迫りくる都市的な価値観や経済の力など、ユートピアとは合い入れない「俗」の世界も忍

び込ませているのである。Mariposa で行なわれた選挙戦はそのクライマックスとして Mr. Smith の存在を示している。彼の勝利は政治的勢力でも、演説の力によるものでもない。彼を当選へと導いたのは、都市部から偽の電報を打たせるといふ、掟破りの情報操作だった。一介のホテル経営者だった彼は、見事に議員へと変身を遂げる。都市からの情報に無防備であり、結局はその方向に追随してしまうという、田舎の人々の心理を上手くついた策略であった。

Mr. Smith は Mariposa の町を完全に掌握した。しかし、彼の博愛主義は決して Mariposa のユートピアとは同じ平面上では交差しない。永遠に出会うことのないねじれの位置にある。しかし、ユートピアという結果を共有することによって、その関係は途切れることなく継続し続ける。Mariposa に外部の価値観を持ち込みながら、Mr. Smith は彼らと同じ町に住みつづける。彼の選挙の勝利は、常に矛盾に囲まれながらユートピアとして存在しつづける Mariposa に必要な安全弁なのだ。そして、その安全弁なしでは、Mariposa は Mariposa Belle のように沈没の危機に瀕してしまうのである。

博愛主義が利益を生み、俗世界で得た経験と知恵が、純朴な人々と無垢な共同体に起こる危機を救う。町の名士になることもなければ、特別な人物として認識されることもない。しかし Mariposa の町の価値観の最大公約数を背負う存在として重要な人物となる。彼が政治という世界に場所を移すことになるのは、当然の流れなのだ。Mr. Smith は反則技とも犯罪とも取れる方法で当選したのであるが、そこへ至る道へのルールは物語の最初から敷かれていたのである。

Leacock は明らかに Mr. Smith と他の人物とを、異なった平面上で描いている。物語に登場する回数が多いだけでなく、独特の価値観をもたせている。それは願望と現実の矛盾に対峙した時、精神の平衡間隔を失わずに実行可能な選択肢で、最善の結果を模索していくという考え方である。それは Tory 主義の Leacock の考え方<sup>10</sup>を投影したものであるが、その効果と影響を的確に判断し、着実に自分に利益となる結果を手に入れる。また、利益は彼個人だけでなく Mariposa の繁栄と人々の喜びにも繋がっていくのである。Mr. Smith は現実と理想の狭間を司る案内人として、Mariposa の町と人々をユートピアへと導いていくのである。

## 結び

*Sunshine Sketches of a Little Town* の小説空間で、Leacock が描いたユーモアはカナダ独特のユーモアである。Leacock の視点とユーモアは、理想の姿と現実との中間に位置する。彼は2つの要素を単に繋ぎ合わせるのではなく、否定するのでもない。読者とその矛盾

を共有し、共通認識としてのユートピアを作り上げたのである。

この意味において Mariposa は町自体が Leacock のユーモアとすることができる。それは Northrop Frye が *The Bush Garden* の中で論じているような風刺である<sup>(1)</sup>。

歴史的に見ても、カナダは常に対極的な価値観と対峙してきた。時代によってその両極にあるものは変化してきてはいるが、何時の時代でもそれは切迫した現実であった。広大なる国土に雄大な自然を抱き、悠久の時に憧れながらも、刻々と変化していく都市化、現代化の波に対応していかざろうえなかった。

*My Discovery of England* の中で、Leacock はイギリス聴衆の前で“Mr. Leacock’s humour is British by heredity; but he was caught something of the spirit of American humour by force of association.”(6)と紹介された。しかしこの両者の性質は決して融和するものではない。Will Ferguson は“Canadians are also acknowledged masters of irony, and oxymoron and irony spring from the same source dilemmas that can’t be solved, yet can’t be ignored.”(16)のように指摘しているようが、これが現実の状況なのである。

カナダは背負うには大きすぎるほどの荷物を、常に背負わされていた。その荷物を放り出すことはできない、ということも理解していた。いくらかの自己尊厳、自己統一性というような概念を犠牲にして、外部の世界との妥協をせざろうえなかったのだ。内面からの願望と、外界からの抑圧の融和は永遠に不可能なのである。

その結果、空間と人間達を繋ぎ合わせるものとしてのユーモアは不可欠なものである。“In our precarious and complicated circumstances, and given our national character, Canadians must either cry with frustration or laugh with Leacock.”(31)という R. E. Watters の言葉が真実味を帯びて聞こえてくる。しかし、その笑いの裏側にはカナダが描いていた夢の国があった。Mark Twain が Mississippi 河上にアメリカの牧歌的な夢と未来への希望を表現したように、Stephen Leacock もイギリス系カナダ人にとっての架空の風景を描き出し、Mariposa という名の理想の共同体を作り上げたのである<sup>(2)</sup>。

しかしそれは同時に、常に対極的な価値観に翻弄され、国として、個人として、自らのアイデンティティと向き合い続けなくてはならないカナダ国民に向けて、新しい時代に生きていく為のバランス感覚を提示するものでもあったのだ。

#### Notes

(1) 以下本文中では、*Sunshine Sketches* と表記する。

(2) “These sorceries present a realistic though nostalgic portrait of a Canada caught between the pioneering past and the twentieth-century future.” (Vancouver Public Library, 76)

(3) Guy Vanderhaeghe は“Mariposa is a small town of a particular time, place, and people.... We also

ought not to forget that it is an Ontario town and British town.”(20)と主張し、カナダ国内のどこにも存在しうる町であるという見方に反対している。筆者もこのことを考慮に入れ、イギリス系カナダと限定して論じる。

- (4) “Mariposa Twp. is a township in Eastern Ontario. Like Orillia, it was given a Spanish name by Sir Peregrine Maitland in the 1820’s. It means “a butterfly”. (McDonald, 22)

Leacock は1908年に Orillia の湖畔に別荘を購入し、休暇中はここで過ごし執筆を続けた。Leacock の死後、別荘は荒れたまま放置されるが、後に改修され現在は Leacock Museum として公開されている。この経緯は、James A. “Pete” Carve, *The Old Brewery Bay: A Leacockian Tale*.の中で詳しく紹介されている。

- (5) The writer’s world is, so to speak, that stretch of years of the parents’ maturity and the writer’s non-age. So Leacock’s world embraces those years from about 1850 to 1900: This is his Mariposan fictional Dominion. (127)

- (6) Jack Hodgins も次のように述べている。“He speaks in the voice of a townsman with evident relish,... at the same time, he seems to take equal pleasure in allowing the innocent narrator so much freedom to be frank....”(189)

- (7) Leacock は Orillia に建てた別荘を、Old Brewery Bay と自ら名づけた。Leacock の姪、Elizabeth Kimball が、“But Old Brewery Bay, although its rooms were only nineteen in number, seem capable of containing any number of guests... the husbands and wives of his brothers and sisters, the nieces and nephews, hosts and armies of friends. It seemed indeed big enough to house the whole world. His great, hospitable spirit made it so.”(88)という回想からもわかるように、Leacock はこの別荘を人々が集まる広場にしたいと考えていた。

- (8) このことは、Orillia での Leacock 自身の状況とも共通している。James Doyle は“Leacock would undoubtedly enjoy anonymity in Orillia as much as fame in international literary circles. As a successful author, a respected McGill professor, and a small-town hobbyfarmer and fisherman, he created a multiple life that fulfilled his conflicting and complementary desires.”(55)と書いているが、それは地元の人々との距離を置いていたことを意味する。

したがって、Orillia の地元の人々からは、都会からやってきたよそ者という目でみられていたとしても不思議ではない。*Sunshine Sketches* が発表された時も、あまりにあからさまに Orillia で実在の人物を作品のモデルにしていたため、トラブルも起こしている。*Feast of Stephen Leacock* の序文で Robertson Davis は次のように解説している。“The originals of some of the characters in *Sunshine Sketches* were indignant, other s were wounded. In an article he wrote for the *Orillia Packet and Times* (March 12, 1957), Dr. C. H. Hale identifies several of those who were originals of characters in the book,...”(19)

- (9) When I go into a bank I get rattled. The clerks rattle me; the wickets rattle me; the sight of the money rattles me; everything rattles me.

The moment I cross the threshold of a bank and attempt to transact business there, I become an irresponsible idiot. (7)

- (10) Gerald Lynch は Leacock の Tory 主義に関して、次のように述べている。“Leacock espouses a kind of secular *via media* over any deviation to left or right. Such a tory-humanist philosophy values moderate, painstaking progress over radical alterations and balances the needs of the interdependent community against the rights of the individual. (22)

- (11) “That is, a good deal of what goes on in Mariposa may look ridiculous, but the norms or standards against which it looks ridiculous are provided by Mariposa itself.”(239)

Alan Bowker も“The real main characters which emerge are not any of the people, but Mariposa and the City themselves.”(xxxix)と同様な意見を述べている。

- (12) Leacock は Mark Twain の伝記を1933年に出版しているが、その中で“American he certainly was. He

had the advantage, or disadvantage, of being brought up solely in his own country, remote from its coasts, with no contact with the outside world, in the days when America was still America.”(6)と述べている。これはイギリスで生まれた Leacock と、生粋のアメリカ人である Twain の相違と考えることができる。

#### Works Cited

- Bowker, Alan. ed. “Introduction.” *Social Criticism: The Unsolved Riddle of Social Justice and Other Essays*. by Stephen Leacock. Toronto: U of Toronto P, 1996. pp. ix–xlviii.
- Curry, Ralph. *Stephen Leacock: Humorist and Humanist*. New York: Doubleday, 1959.
- . *Stephen Leacock and His Works*. Toronto: ECW P.
- Clever, Glenn. “The Achievement of *Stephen Leacock*.” *Stephen Leacock: A Reappraisal*. ed. David Staines. Ottawa: U of Ottawa P, 1986. pp. 121–31.
- Davies, Robertson. *Feast of Stephen Leacock*. Toronto: McClelland & Stewart, 1970.
- Doyle, James. *Stephen Leacock: the Sage of Orillia*. Toronto: ECW Press, 1992.
- Ferguson, Will. *Why I hate Canadians?* Vancouver: Douglas & McIntyre, 1997.
- Frye, Northrop. *The Bush Garden: essays on the Canadian Imagination*. Concord: Anansi, 1971.
- Hodgins, Jack. “Afterword.” *Sunshine Sketch of a Little Town*. Toronto: McClelland & Stewart, 1931. pp. 187–91.
- Kimball, Elizabeth. *The Man in the Panama Hat*. Toronto: McClelland & Stewart, 1970.
- Leacock, Stephen. *Mark Twain*. New York: D. appleton, 1933.
- . *My Discovery of England*. London: Bodley head, 1922.
- . “My Financial Career.” *Literary Lapses*. Toronto: McClelland & Stewart, 1910. pp. 7–10.
- . *Sunshine Sketches of a Little Town*. Toronto: McClelland & Stewart, 1931.
- Lynch, Gerald. *Stephen Leacock: Humour and Humanity*. Montreal: U of McGill P, 1988.
- McDonald, Ross. *Why Call it That? The Origin of Most of the Street and Place Names in Orillia*. Orillia: The Orillia Historical Society, 1990.
- “Pete” McGarvey, James A. *The Old Brewery Bay: A Leacockian Tale*. Toronto: Dundurn P, 1994.
- Vancouver Public Library. *Great Canadian Books of the Century*. Vancouver: Douglas & McIntyre, 1990.
- Vanderhaeghe, Guy. “Leacock and Understanding Canada.” *Stephen Leacock: A Reappraisal*. ed. David Staines. Ottawa: U of Ottawa P, 1986. pp. 17–21.
- Watters, R. E. “A Special Tang: Stephen Leacock’s Canadian Humour” *Canadian Literature*, 5 Summer, 1960. pp. 21–32.